『今昔物語集』における「鬼」と「天狗」

――巻二十第七話を中心に――

久留島　元

一、問題の所在

『今昔物語集』巻二十第七話「染殿后為天宮被嬈乱語」は以下のような説話である。

今は昔、染殿后は関白・良房の娘で「文徳天皇ノ御母」であった。大変な美人だったが、「常ニ物ノ氣ニ煩ヒ」、数々の祈禱も効果がなかった。そのころ金剛山に「貴キ聖人」がおり、天皇はこれを召した。聖人は度々断ったが、「宣旨難背キ」により下山する。聖人が祈るとひとりの侍女の懐から「老狐」が出てきたので、これを捕えると数日中に后は回復した。喜んだ大臣は聖人の逗留を願う。

滞在中、聖人は風にひるがえった御帳のかげから后の姿を垣間見、「愛欲ノ心」をおこす。聖人は思い煩った挙句、御帳のなかに侵入するが、侍医の當麻鴨継に取り押さえられる。獄中で聖人は「我、忽ニ死テ鬼ト成テ」、「本意ノ如ク、后ニ睦ビム」と誓う。大臣はこれを怖れて天皇に奏し、聖人を赦免した。しかし聖人は山に帰ると食を断って飢死し「忽ニ鬼ト成」った。「膚ノ黒キ事、漆ヲ塗レルガ如」き鬼となった聖人は后を惑わし、鴨継を祟り殺す。天皇が高僧たちに祈らせると鬼は姿を見せなくなる。しかし喜んだ天皇が行幸すると「例ノ鬼、俄ニ角踊出テ」、百官の前で后と「艶ズ見苦キ事」を見せた。天皇はそれを見て「可為キ方无ク」歎くばかりだった。

これだから、「止事无ナカム女人」は「如然シ有ラム法師」を近づけてはならない。

これは極めて憚り多いことだが「末ノ世ノ人ニ令見テ、法師ニ近付カム事ヲ強ニ誡メムガ為ニ、此ク語ト傳ル」という。

よく知られるように、染殿后にまつわる説話は数多く、その変容、伝播に関しては先学の蓄積がある。その中で神野志隆光氏は、染殿后説話を、本来別々に発生した二種類の系統に分類し、二系統の説話の混線により多くの異伝が生じた、とする。[1] 神野志氏の説をふまえると、染殿后説話は本来次のように分類できる。

- 無名の「聖人」が愛欲を起こして「紺青鬼」となり、「染殿后」を悩ます。
- 「真済和尚」が邪執によって「天狗」となり、「染殿后」を悩ますが、高僧（「相応」など）に調伏される。

『今昔物語集』所収説話は、前者の代表的なものであり、直接の影響関係は明らかではないが逸文『善家秘記』との強い影響関係があるとされる。[2]『善家秘記』は八世紀の文人貴族、三善清行が著述したとされるが、散逸しており、逸文七条が現存する。そのうち染殿后に関する説話は『扶桑略記』元慶二年九月二十五日丁巳条に引かれている。

善家秘記言、清和太上天皇奉賀太皇太后藤原明子知命之筭、設讌楽獻慶賀、太上皇匍匐太后之前、再拝獻千万齢之壽、時太后悦忽、无有人心、而鬼在太后之傍、宛如夫婦之好、杯觴飯宴之間、与太后戯相娯、太上天皇見之、太悪厭世。

また、同一説話と思われる説話が、『真言伝』巻四相応和尚伝にも引かれている。内容は『真言伝』所引逸文のほうが詳しく、『今昔物語集』に近い。[3]

『今昔物語集』所収説話には従来、大きな問題点が指摘されている。それは標題に「天宮」が后を悩ませた、とあるにも関わらず本文中に「天宮」が登場しない、という点である。集中で他に「天宮」が使われる例を見ると多くは「天狗」と混用されている（巻二十第二話、第十一話、第十二話）ため、「天宮」は単純に「天狗」の宛字と考えてよいが、標題「天宮（狗）」は何を指しているのだろうか。『扶桑略記』所引逸文、『真言伝』所引逸文はともに標題を持たないが、現存本文に「天宮（狗）」は見えない。そのため標題「天宮」は『今昔』編者の説話理解を反映していると推測される。先行の注釈書を概観する。

- 相応和尚が貞観七年無動寺の不動明王に祈って太后に乗り憑った柿下天狗（紀僧正則ち真済の霊という）を降伏した話と、太后の病を医した金峰山上人の話とが混交しているように思われる。（山田孝雄他『日本古典文学大系』）
- 表題の「天宮（狗）」は物語内にみえず、聖人が鬼に変化したのを天狗と解したことになる。真済天狗が染殿后にとりつき、相応和尚に調伏される相応和尚伝系のイメージもあったか。あるいは冒頭の老狐を天狗と見ることも可能か。（小峯

和明『新日本古典文学大系』脚注）

• 標題の天宮（天狗）は登場しないが、霊鬼をそれと解したものか（馬淵和夫、国東文麿、稲垣泰一『新編古典文学全集』）

すでに森正人氏が明快に論じたように、[4]『今昔物語集』では天狗に関する説話は、巻十第三十四話を除いて全て巻二十「本朝付仏法部」最終巻に収められ、多くは仏教修行者を障碍する存在として現れる。そのため「天狗」は「仏法に対立する性格を与えられた魔物」として性格づけられているとされる。本話は巻二十第一話から始まり第十二話まで続く一連の「天狗説話」の中に位置付けられているから、『今昔』が第七話を「天狗説話」と捉えていたことは明らかであり、他の説話との単純な混同、混乱はあり得ない。

小峯和明氏は次のように述べる。[5]

では、今昔物語集が鬼の話を天狗譚と捉える根拠はどこにあっただろうか。これは二話一類の配列方式に求めることができそうだ。前話は仏眼寺の阿闍梨仁照に薄師の妻が帰依し、ついには誘惑しようとしたため、仁照が不動を念じたところ、女にとりついていた天狗が正体を暴露して退散する話。女にとりついた物怪を僧が調伏し、一方は恋に狂い、他方は惑わされないという連想契機が両話間に介在していることが知られる。（略）話の発端を契機に前話と連接されており、従って女にとりつく「物」（老狐）を「天狗」とうけとめたことになろう。

ただし、私見では第七話は前話第六話よりも第八話「良源僧正成霊来観音院伏余慶僧正語」（本文欠話）との連関が強い。第六話の女にとりつく天狗の話は第五話尼天狗の話とのつながりが深く、第七話との連関を重視する必要はない。小峯説は必ずしも説得力に富むものとは言えない。森正人氏は小峯説に対し次のように反論する。[6]

しかし、当時の通念によれば天狗道には僧が驕慢や執着のために堕ちるのであって、この場合も修験者の転生した鬼が天狗と見なされていると解すべきであろう。是害坊絵巻のなかで、平（比良）山の天狗が過去の天狗の所業をいくつか挙げて、（本文略）と語って、紺青鬼＝天狗という理解がなされている。こうして、今昔物語集が第7の物語を天狗説話と見なしたのも、決して違例とはいえない。

先行研究では「鬼＝天狗」の解釈が優勢のようだが、有力な根拠はなく、田中貴子氏は現在も「天宮」が何を指すのかは不明のままであるとする。[7] また小峯、森両氏ともに標題と説話本文との間に「齟齬」を認める立場にある。[8] しかし先述のように『今昔』編者にとって第七話は明確に「天狗説話」だったはずである。編者が「天宮」と捉えたものは何だったのか、それを知るためには同時代の作品との比較も重要だが、まずは『今昔物語集』における「鬼」像と

「天狗」像との双方をきちんと捉える必要がある。

本稿ではそのうえで、『今昔』編者が本話を「天狗説話」と捉えた理由を考えたい。

二、『今昔物語集』における「鬼」

『今昔物語集』には「鬼」の用例が多い。一般に「天狗」の「反仏法的」に対して「鬼」は「非仏法的」であるといわれているが、[9] 仏法部に現れて仏法に敵対する鬼、また仏法に従事する鬼も数多く登場する。これらを総合するといくつかの分類ができる。

『今昔』の「鬼」については稲垣泰一氏の分類[10]があり、詳細を極める。しかしこの分類は氏自身が述べる如く、「平安時代における〈鬼〉の様相の一端をさぐってみようとする」ものであり、『今昔』の文脈にそった分類ではない。氏はまず『今昔』の「鬼」の用例を大きくふたつに分類する。

分類Ⅰ　説話の場面に〈鬼〉が登場したり、そう呼称されるものが見られる話（この中には死後の冥土の世界、夢中の世界に〈鬼〉が登場するものをも含む）

分類Ⅱ　本来は〈鬼〉ではないものを、〈鬼〉に比喩したり、〈鬼〉に比較したり、または〈鬼〉と想像したりする表現が見られる話

さらに稲垣氏はそれぞれを細かく次のように分類している。

分類Ⅰ

① 六道の〈鬼〉（餓鬼）
② 地獄の〈鬼〉
③ 仏法に対立する悪い〈鬼〉
④ 仏法守護の〈鬼〉
⑤ 在来の神を〈鬼〉とするもの
⑥ 疫病神としての〈鬼〉
⑦ 百鬼夜行の〈鬼〉
⑧ 陰陽道の〈鬼〉
⑨ 人が変化した〈鬼〉
⑩ 特有の場所に出る〈鬼〉
⑪ その他の〈鬼〉

分類Ⅱ

① 地獄の〈鬼〉
② 仏法に対立する悪い〈鬼〉
③ 仏法守護の〈鬼〉
④ 在来の神が変化した〈鬼〉
⑤ 陰陽道の〈鬼〉
⑥ 人にのりうつる〈鬼〉
⑦ 特有の場所に出る〈鬼〉
⑧ 墓や死人の傍に居る〈鬼〉
⑨ 神と同格　畏怖の〈鬼〉
⑩ 姿形、能力、心などを畏怖する〈鬼〉

このうちⅡについて、氏は「〈鬼〉を当時どのように捉えていたかを考える際には、重要な意味を持ってこよう」とする。しかし、人を「鬼」と誤認したり、「鬼のような」と形容したりする表現は、『今昔』編者自身が「鬼」と表現しているⅠとはおのずから性質を異にする。従って、『今昔物語集』のなかの「鬼」がどう認識されているか、を見るためにはⅡの多くを分析の対象外とすべきである。

また、稲垣氏はⅠの用例に「鬼」「鬼神」「獄卒」「悪鬼」「羅刹」

を含めている。このうち「獄卒」「羅刹」は「鬼」と同一視される例もあるが、表記が異なることから基本的には分けて考えるべきであろう。稲垣氏の分類にはそのほかにも検討すべき事例がある。たとえば巻二十七第二十八話「於京極殿有詠古歌音語」では上東門院が京極殿南面で何者かが古歌を詠むのを聞く。上東門院は「此ハ何カニ、鬼神ナドノ云ケル事カ」と怖れており、稲垣氏はこの用例を分類Ⅰの⑩「特有の場所に出る〈鬼〉」の例に含んでいる。しかし説話本文ではこのあと編者による話末評語が以下のように続く。

此レヲ思フニ、此レハ狐ナドノ云タル事ニハ非ジ。物ノ霊ナドノ此ノ歌ヲ「微妙キ歌カナ」ト思ヒ初テケルガ、花ヲ見ル毎ニ常ニ此ク長メケルナメリトゾ人疑ヒケル。然様ノ物ノ霊ナドハ夜ルナドコソ現ズル事ニテ有レ、真日中ニ音ヲ挙テ長メケム、実ニ可怖キ事也カシ。

何ナル霊ト云フ事遂ニ不聞エデ止ニケリトナム語リ伝ヘタルトヤ。

ここで編者は、これは狐などではなく「物の霊」の仕業であろう、とこの古歌を詠ずるものの正体を「霊」としている。すなわち編者にとってこれは「鬼」でも「狐」でもなく「霊」なのであり、これを「鬼」の例ととることはできない。

そこでこれらの点を考慮した上で『今昔』の「鬼」の用例を精査する必要が生まれる。索引や稲垣論文を参考に「鬼」「鬼神」という語の登場する説話の数を総計すると百話にのぼる。これらは以下のように分類が可能である（→分類表参照）。

1 … 人を食うもの。……18例
2 … 仏法を守護するもの。……12例
3 … 集団で徘徊するもの。……5例
4 … 地獄にいるもの。……14例
5 … 仏法以外の信仰をうけるもの。……5例
6 … その他の正体不明な鬼。……7例
7 … 編者によって「鬼」以外に分類されるもの。……6例
8 … 「鬼」以外を誤認したもの。……12例
9 … 怖ろしいものの形容、または慣用句的用法……21例
10 … その他の用例。……5例

分類の基準を明確にするために1～6の「鬼」についてはその行動を中心に分類を試みた。また7～10は先に言及したとおり『今昔』における「鬼」として扱うべきではないと思われる用例である。先述の巻二十七第二十八話のように話末評語、標題など編者が付したと思われる表記と、説話本文の表記とが異なる場合は編者の判断を優先した。ただし、巻一第三十七話のように、小児を喰おうとした「鬼神」が金剛神に降伏されて仏法の外護者となるなど、一話の間に分類が変化する例もある。

さてこのように見ると「鬼」「鬼神」ともに全巻通じてあらわれ

るが、特に[2]仏法を守護する「鬼」は仏法部に多く、「鬼神」と呼ばれる傾向にある。また、分析の対象外に置くべきだとした[8]や[9]の用例だが、稲垣氏の説くように「鬼」が「恐ろしい姿」と「恐ろしい心根」とを持つという、ひろい理解があったことがわかるのも興味深い。日本では平安中期に「鬼」は目に見えないものとする認識があったが、『今昔』のなかでは「鬼」の可視不可視は混在しており、具体的な「鬼」像も普及していたことが伺われる。[11]

『今昔』の「鬼」の分類としてもうひとつ注目すべきことは、死者としての鬼が極めて少ないということである。「鬼」という語は本義的には死者をあらわすとされ、[12]『江談抄』巻三では阿部仲麻呂の霊が「鬼物」と称される。また廣田收氏は『今昔』の「鬼」の分類を試みた論考で「最も根底的な」鬼として「死者としての鬼」を挙げている。[13]

しかし、廣田氏の挙げる巻十四第四話「女依法花力轉蛇身生天語」の例は、私見によれば[7]、鬼以外の用例に分類される。この話では、石淵寺の参詣客が次々と死ぬことを怪しんだ吉備大臣が寺に赴き、参詣客をとり殺しているのが金千両を抱いて死んだ女の霊（「女霊」）であることを知り、その金を法花経功徳のために使ってやることとしたため女は無事転生を果たす。大臣は近づく「女霊」を「然レバコソ鬼ノ来テ人ヲ噉フ也ケリ」と認知する。すなわち女霊を「鬼」と捉えたのは相手の正体を知る前の大臣であり、以後、本文では「女霊」で統一される。この説話の例は[7]に分類するのが妥当であろう。

死者としての「鬼」は巻九第三十六話「震旦賭仁蒨、願知冥道事語」に登場する。この「鬼」は、生前人間だったらしいが死後に冥府の官吏として勤め、自らを「鬼」と自称する。稲垣氏はⅠの②「地獄にいる鬼」に分類しており、私見もそれに倣った。ただしこの「鬼」は六道のうち天・人・地獄以外の「鬼及ビ畜生」に該当する、と自ら発言している。また巻七第十七話「豫州恵果、讀誦法花経救剛鬼語」には転生して糞を食う「鬼」となった男が登場する。この「鬼」は「餓鬼」の類と思われる。死者としての「鬼」に分類できるのはこの二例のみで、同じ死者でも六道という仏教的理解の範疇にあり、先述の「霊」とは一定の差異化が図られているようである。[14]

三、巻二十第七話「天宮」の正体

前節で『今昔物語集』における「鬼」が、具体的に恐ろしい容貌をもつとされていること、また死者としての「鬼」の例が少なく、「霊」との差異化が図られていることを示した。このことをふまえたうえで、巻二十第七話の「鬼」について改めて考えてみたい。

巻二十第七話の「鬼」は、本来道心堅固な「聖人」が、染殿后の姿を垣間見、愛欲の心抑えがたく、餓死して「鬼」の姿となったものである。

現世ニ其事ヤ難カリケム、「本ノ願ノ如ク、鬼ニ成ラムト」思ヒ入テ、物ヲ不食ザリケレバ、十餘日ヲ経テ、餓ヘ死ニケリ。其後、忽ニ鬼ト成ヌ。

すなわち「聖人」の死後の姿であり、しばしば指摘されるように天皇家に祟りをなす御霊に近い。森氏は先に引いたように、「天狗」は「僧が驕慢や執着のため堕ちる」という「当時の通念」があった、とする。確かに、近年注目を浴びる『七天狗絵』[15]や『沙石集』に代表される言説[16]は存在するが、それが先行する『今昔』にも認められるかどうかは慎重に検討すべき課題である。僧の死後の姿としての「天狗」像は、欠話である第八話を除くと、本話と構造上の類似が指摘される巻十第三十四話にも見いだせる。しかし例えば巻三十一第二十四話には慈恵僧正（良源）の「霊」が寺領争いに介入したとある。どのような「霊」が「天狗」とされるのか、については稿を改めて考えたいが、ここでは「霊」が「天狗」とされうる可能性から、本話の「鬼」の「霊」的側面を確認しておきたい。

巻二十第七話「鬼」についてはもうひとつ、他の「鬼」の用例にない特色がある。

而ル間、此鬼、人ニ託テ云ク、「我必ズ彼ノ鴨継ガ怨ヲ可報シ」ト。

この部分は『真言伝』所引逸文でもほぼ同文である。

鬼人ニ託テ云。鴨継ヲ報セント思フト。

ここでは「鬼」が憑巫にとり憑いてものを語っているのであり、本話冒頭の「老狐」にも通ずる、憑霊一般の記述に近い。このような人に「とり憑く」という性格は『今昔』集中、この一例しか見られない。前掲の稲垣分類ではⅡの⑥「人にのりうつる〈鬼〉」を挙げるが、ここでの用例（巻十二第三十三話、巻二十第三十三話）はいずれも理解できない人間の言動に対する定型的、慣用句的表現として用いられている。実際に「鬼」がとり憑く記述があるのは本話のみの特色であるが、一方で「天狗」が人にとり憑くという記述は多い。前話第六話では女にとり憑いた「天狗」が高僧を誘惑し、また同巻第二話「震旦天狗智羅永寿、渡此朝語」は説話の伝承経路を

此、天狗ノ人ニ託テ語ケルヲ、聞キ継テ、此ク語リ伝ヘタルト也。

と記す。また「人にとり憑いて正気を失わせる」のは、院政期前後の「天狗」の性格としてひろく認知されていた[17]。本話の「鬼」も

而ル間、此ノ鬼ノ魂、后ヲ悩ラシ狂ハシ奉ケレバ

のように染殿后の正気を失わせている[18]。これも『真言伝』所引逸文に

后本心ヲ失テ鬼ト通ス

という表現が確認できる。

四、まとめ

以上のように巻二十第七話における「鬼」は、人にとり憑く霊、という特徴的な性質を持つ。これらは『今昔』における他の「鬼」の用例には見えない特色であるが、同文的同話である『真言伝』所引逸文でも同様の特徴が見いだせる。『今昔』編者は原話にあった染殿后を惑わせる「鬼」の特徴をもとに、この「鬼」を「天狗」と捉え直したのではないだろうか。『今昔』編者は、原話尊重の立場から本文はそのままに語りながら、標題と配列によって「天狗説話」という独自の認識を表明したと推測されるのである。

※本文の引用は『日本古典文学大系今昔物語集　四』（岩波書店、一九六二年）、『大日本仏教全書第六十八巻　真言伝』（鈴木学術財団、一九七二年）に拠った。

※附記　分類表に示した「鬼」の表記は本来、各話の出典や関連話における表現との比較検討を経てから分類すべきである。今回はその他の「鬼」像と巻二十第七話の「鬼」との違いを明らかとすることを目的としたため作業が及ばなかった。今後の課題としたい。

注

① 神野志隆光「紺青鬼攷―特に真済をめぐって」『国語と国文学』五〇巻一号（一九七三年）。このほか染殿后説話に関しては渡辺博史「二つの紺青鬼譚―染殿后怪異譚の流れ（下）」『立教大学日本文学』四三号（一九七九年十二月）、田中貴子「鬼に取り憑かれた〈悪女〉　染殿后と位争い」『〈悪女〉論（紀伊國屋書店、一九九二。のち角川文庫版、二〇〇二年）、廣田收「「染殿后」考」『宇治拾遺物語』「世俗説話」の研究』（笠間書院、二〇〇三年）などに多く示唆を受けた。

② 山田孝雄校注『日本古典文学大系今昔物語集　四』頭注。今野達「善家秘記と真言伝所引散佚物語―今昔物語集との関連において」『国語と国文学』三五巻一一号（一九五八年）のち『今野達説話文学論集』（勉誠出版、二〇〇八年）。

③ 『真言伝』所引逸文は書き下しの形だが、『扶桑略記』所引逸文とは表現が異なり、『善家秘記』本来の文を忠実な書き下しではない可能性がある。詳細は稿者も参加した怪異史料研究会「三善清行『善家秘記』注解（その四）」『続日本紀研究』三七〇号（二〇〇七年十月）を参照。

④ 森正人「天狗と仏法―今昔物語集の統一的把握を目指して」『愛知県立大学文学部論集』三四号（一九八五年）。のち「天狗と仏法」『今昔物語集の生成』（和泉書院、一九八六年）所収。

⑤ 小峯和明「今昔物語集における説話受容の方法」『国文学研究』五九集（一九七六年六月）。のち「本朝仏法部の組織」『今昔物語集の形成と構造』（笠間書院、一九八五年。一九九三年補訂版）所収。なお、小峯氏「怨霊から愛の亡者へ」『説話の森』（大修館書店、一九九一年）では「老狐」説には触れず、「表題は天狗なのに中身は鬼」とのみ紹介する。

⑥ 森氏前掲論文。

⑦ 田中氏前掲論文。

⑧ 森氏前掲論文。また小峯氏も前掲論文の最終稿（補訂版、一九九三年）で森氏の反論にふれ、「どちらにしても内容と把握法にずれがあることは明らかである」と述べる。

⑨ 森氏前掲論文。

⑩ 稲垣泰一「『今昔物語集』の〈鬼〉の諸相」『金城国文』五九号（一九八三年三月）。

⑪ 鬼の図像については怪異史料研究会「『善家秘記』注解（その一）」『続日本紀研究』三六七号（二〇〇七年四月）を参照。

⑫ 諸橋轍次『大漢和辞典』では「①おに。イ死人のたましひ。人が死ねば心思をつかさどる魂は天にのぼつて神となり、形躰は地に歸り、形躰の主宰である魄は鬼となる。」とする。

⑬ 廣田收「『瘤取爺』類話考」『宇治拾遺物語』表現の研究』（笠間書院、二〇〇三年）所収。

⑭ 巻二十七第一話「三条東洞院鬼殿霊語」では、地名としては「鬼殿」の語が用いられるが、本文では男の「霊」がその地に止まっていると語られ、「霊」の表記で統一される。

⑮ 『七天狗絵』（『天狗草紙』）は南都北嶺の驕慢、我執の僧侶を「天狗」と批判する。若林晴子「『天狗草紙』に見る鎌倉仏教の魔と天狗」『絵巻に中世を読む』（吉川弘文館、一九九五年）、同「『天狗草紙』に見る園城寺の正当性」『説話文学研究』三八号（二〇〇三年六月）、高橋秀栄「『七天狗絵』の詞書発見―付翻刻『七天狗絵』詞書」『文学』四巻六号（二〇〇三年十一月）など。

⑯ 『沙石集』には「善天狗、悪天狗ト云テ二類アリ。悪天狗ハ、一向憍慢偏執ノミ有テ、佛法ニ信ナキ物ナリ」とある。

⑰ 酒向伸行「天狗信仰の成立と台密―真済の問題を中心として―」『御影私学論集』二三号（一九九八年十月）。佐伯真一「憑依する悪霊―軍記物語の天狗と怨霊に関する試論―」『青山語文』三一号（二〇〇一年三月）

⑱ よく似た表現が巻七第十五話「僧、為羅刹女被嬈乱依法花力存命語」にある。僧侶を誘惑しようとする羅刹女が美女に変じて現れ、「僧、忽ニ鬼ニ被嬈レテ、既ニ女鬼ト娶ヌ」という場面で「通ジテ後、僧ノ心恍レテ、更ニ本ノ心ニ非ズ成ヌ」とある。この「女鬼」は僧を悩ませ正気を失わせているが、実体を有しており「天狗」とはされていない。

	巻	話数	標題	本文	分類	認識主体
1	1	37	財徳長者幼子、称佛遁難語	忽ニ鬼神空ヨリ下リ来リテ小児ヲ取テ噉テムトス。	①→②	本文
2	2	2	佛、爲摩耶夫人昇忉利天給語	鬼神ヲ以テ忉利天ヨリ閻浮提ニ三ノ道ヲ造ラシム。	②	本文
3	2	25	波羅奈國大臣、願子語	「汝ハ此レ天龍カ鬼神カ」	⑨	会話
4	3	14	波斯匿王娘、金剛醜女語	太キ髪左ニ巻テ鬼ノ如也		本文
5		15	摩竭提國王、燼杭太子語	今日我ガ教化ヲ蒙テ鬼ノ形ヲ改テ端正ノ姿ト成テ	⑨(形容)	会話
6	4	3	阿育王殺后立八万四千塔語	形貌ノ醜キ事、鬼神ニ不異ズ。	⑨(形容)	本文
7		20	天竺人、爲国王被召妻人、依唱三歸免虵害語	「我レ、諸ノ鬼神并ニ夜叉神等ヲ召シテ、	②	会話
				大王、龍王ト共ニ船ニ乗テ多ノ鬼神等ヲ具シテ龍宮ヘ行給フ		本文
				「傳ヘ聞ケバ、彼ノ道ハ多ノ鬼神有リ。	①	会話
8	5	5	國王、入山狩鹿母夫人為后語	四日ト云フニ守門ノ鬼ノ許ニ至ヌ。鬼、此ヲ見テ、	①→②	本文
9		21	天竺狐、借虎威被蠬菩提心語	若シ在家ナラバ鬼神此レヲ護テ持タセ、	②(⑨)	会話
10		31	天竺牧牛人、入穴不出成石語	八万四千ノ鬼神ヲ仕率トシテ一切衆生ニ福ヲ授クベシ	②	会話
11	6	6	玄奘三蔵、渡天竺傳法歸來語	一ノ悪鬼出来テ其ノ持タル菓ヲ奪フ	②	本文
12		11	震旦唐虞安良兄、依造釈迦像得活語	人ニハ非デ異形ノ鬼共ノ極テ怖シ氣ナル者共ノ行ク也ケリ。	③	本文
13		20	江陵僧亮、鑄弥陀像語	我レ、初メ馬ヨリ落テ悶絶セシ時、忽ニ、馬ノ頭・牛ノ頭ノ鬼有テ、	④	会話
14		27	震旦并洲常愍、渡天竺礼廬舎那語	亦、彼ノ鬼神ヲモ道ビカム	⑤	会話
15	7	15	僧、為羅刹女被嬈乱依法花力存命語	昔シ、其ノ國ニ鬼神有テ人民悩乱ス	⑤(荒神)	会話
				寺ノ外ニ立出デ、遊行スル程ニ羅刹女ニ値ヌ。鬼忽ニ変ジテ女ノ形ト成ヌ、	①	本文
16		17	震旦會稽山弘明、轉讀法花経縛鬼語	亦、其ノ所ニシテ山ノ精ノ鬼來テ弘明ヲ悩ス。	⑥(山精)	本文
17		21	豫州恵果、讀誦法花経救厠鬼語	此ノ和尚、昔シ、厠ノ前ニシテ一ノ鬼ニ値フ、	⑩(餓鬼)	本文
18	9	29	震旦京兆、殷安仁、免冥途使語	使ノ鬼不近付ズシテ語テ云ク	④	本文
19		32	侍御史、遜迥璞、依冥途使錯従途歸語	人答テ云ク、「我レハ、此レ、鬼也。	④	会話(自称)
20		36	震旦眭仁蒨、願知冥道事語	答テ云ク、「我レハ、此レ、鬼也。	④(死者?)	会話(自称)
21	10	23	病成人形、醫師聞其治病語	忽ニ二人ノ鬼有テ歎テ云ク	⑩(疫鬼)	本文
22	11	3	役優婆塞、誦持呪鬼神語	夜ハ諸々ノ鬼神ヲ召使テ	②	本文、標題
23	12	28	肥後国書生、免羅刹難語	「我ハ此レ鬼ノ家ニ来リニケリ	①	会話
				而ルニ、此ノ鬼、馬を噉ヒ畢テ、		本文

24		33	多武峯増賀上人語	若シ此レ鬼神ノ託テ令云ル事カ	⑧(慣用句)	会話
25		37	信誓阿闍梨、依経力活父母語	(夢ニ)五色ノ鬼神集会シテ	④	会話
26		38	天台圓久、於葛木山聞仙人誦経語	持経者ヲ嬈乱セムガ為ニ、悪鬼ノ來レルカ	⑧(仙人)	心中
27		40	金峰山薊獄良算持経者語	初ハ鬼神来テ持経者ヲ擾乱セムト……後ニハ鬼神、経ヲ貴ムデ	①→②	本文
28	13	1	修行僧義睿、値大峯持経仙語	様々ノ異類異形ナル鬼神共来ル	②	本文
29		17	雲浄持経者、誦法花経免蛇難語	此ハ鬼神ナドニコソハ有ラメ	⑧(人食い)	心中
30	14	4	女、依法花力転蛇身生天語	鬼ノ来テ人ヲ噉フナリ	⑦(女霊)	心中
31		7	修行僧、至越中立山會小女語	若シ、此レ鬼神カ。人无キ山中ニ此ノ女出来レリ	⑧(女)	心中
		29	橘敏行発願従冥途返語	鬼ノ如クナル馬ニ	⑨	本文
33		35	極楽寺僧、誦仁王経、施霊験語	極メテ怖シ気ナル鬼共有リテ、取ヽニ我ガ身ヲ揆躒シツル程ニ	④	本文
34		42	依尊勝陀羅尼験力、遁鬼難語	人ニハ非デ鬼共也ケリ	③	本文、標題
35		43	依千手陀羅尼験力、遁蛇難語	我レハ此レ鳩槃荼鬼也	②	会話(自称)
36	15	4	薬師寺済源僧都、往生語	(火ノ車)ニ付ケル鬼共、	④	会話
37	16	32	隠形男、依六角堂観音助顕身語	人ニハ非ズシテ、怖シ気ナル鬼共ノ行ク也ケリ	③	本文
38		36	醍醐僧蓮秀、仕観音得活語	只極メテ怖シ気ナル鬼神ヲノミ見ル	④	会話
39	17	6	地蔵菩薩、値火難自出堂語	毘沙門ハ鬼形ヲ不踏給ズ	⑥(台座)	会話
40		25	養造地蔵仏師得活人語	我レ、死シ時、忽ニ猛ク恐シキ大鬼二人来テ、	④	会話
41		26	買亀放男、依地蔵助得活語	二人ノ鬼前後ニ有テ打チ追テ来ル	④	会話
42		42	於但馬國古寺毘沙門、伏牛頭鬼助僧語	鬼、僧ヲ摑ミ、刻テ忽ニ噉フ。	①	本文
43		43	籠鞍馬寺遁羅刹鬼難語	羅刹鬼、女ノ形ト成テ	①	本文
44		47	生江世経、仕吉祥天女得富貴語	額ニ角ノ一ツ生テ、目一ツ有ル者ノ、赤キ俗衣ヲシタル鬼也	②	本文
45	19	4	摂津守源満仲出家語	此ク鬼ノ様ナル心ニテハ候ドモ	⑨(形容)	会話
46		8	西京仕鷹者、見夢出家語	鬼ノ様ナル鷹ニ	⑨(形容)	会話
47		12	於鎮西武蔵寺翁出家語	「此ハ早ウ鬼神ノ云フ事也ケリ	⑧(梵天)	心中
48		20	大安寺別当娘許蔵人通語	打チ責テ鬼ノ呑マセムソラ……銅ノ湯ヲ	④	会話
49		28	僧蓮円、修不軽行救死母苦語	一ノ鬼出来セリ。……我ハ獄卒ナリ	④	本文
50		44	達智門棄子狗、蜜來令飲乳語	可然キ鬼神ナドニヤ有ケム	⑨(慣用句)	本文
51	20	7	染殿后為天宮被嬈乱語	十餘日ヲ経テ、餓へ死ニケリ。其後、忽ニ鬼ト成ヌ	⑦(天狗)	本文
52		10	陽成院御代滝口、金使行語	鬼ニマレ神ニマレ、寄テ懐ケ	⑨(慣用句)	心中
53		15	摂津国殺牛人、依放生力従冥途還語	崇ル所ノ鬼ヲ祭ラムガ爲ニ殺セル也		会話

				其後ハ弥ヨ實ノ心ヲ發シテ、鬼神ヲ不崇ズシテ、	⑤(蕃神)	本文
54		18	讃岐国女行冥途、其魂還付他身語	閻魔王ノ使ノ鬼	④	本文
55		19	橘磐島、賂使不至冥途語	閻魔王ノ使…鬼ノ云ク	④	本文
56		33	吉志火磨、擬殺母得現報語	汝何ノ故ニ瞋レルゾ、若鬼ノ託タルカ	⑨(定型)	会話
57		37	耽財、娘為鬼被噉フ悔語	此レ、鬼ノ人ニ変ジテ來テ噉ゼンカ	①	会話、標題
58	24	15	賀茂忠行、道傳子保憲語	然レドモ幼童ノ時ニハ此鬼神ヲ見ル事ハ无カリキ	⑤(陰陽道)	会話
59		16	安倍晴明隨忠行習道語	艶ズ怖キ鬼共車ノ前ニ向テ来ケリ。	③	本文
60		24	玄象琵琶、爲鬼被取語	鬼ノ取リタリケル也	⑥(鬼)	会話、標題
61	25	7	藤原保昌朝臣、値盗人袴垂語	辟ヒ何ナラム鬼也トモ神也トモ	⑨	心中
62		11	藤原親孝子、為盗人被捕質依頼信言免語	鬼ニモ神ニモ取リ合ナドコソ	⑨	会話
63	26	8	飛驒国猿神、止生贄語	此ハ人ニハ非デ、鬼ニコソ有ケレ	⑧	心中
64		19	東下者宿人家値産語	然バ其ヲ鬼神ナド云ケルニコソ有ケレ	⑥	心中
65	27	1	三条東洞院鬼殿霊語	東ノ角ハ鬼殿ト云所也	⑩(地名)	本文、標題
66		7	在原業平中將女被噉鬼語	倉ニ住ケル鬼ノシケルニヤ有ケム。	①	本文、標題
67		8	於内裏松原鬼、成人形噉女語	此レハ鬼ノ、人ノ形ト成テ此ノ女ヲ噉テケル也ケリトゾ。	①	会話、標題
68		9	参官朝廳弁、為鬼被噉語		①	標題
69		12	於朱雀院被取餌袋菓子語	鬼ナムドノ取テケルニヤ候ラム	⑥(鬼)	会話
70		13	近江国安義橋鬼、噉人語	極ジキ鬼也トモ此御舘ニ有ル・ノ鹿毛ニダニ乗タラバ	①	会話、標題
				鬼走リ懸テ、馬ノ尻ニ打懸ゝ、引フルニ、		本文
71		14	従東国上人、値鬼語	「此ハ定メテ鬼也ケリ」ト		心中、標題
				鬼來ヌ	①	本文
72		15	産女、行南山科値鬼逃語	此ハ鬼ニコソ有ケレ		心中、標題
				定メテ鬼ナドニコソハ有ケメ	①	話末評語
73		16	正親大夫、□□若時値鬼語	鬼ノ住ケル處ニ人ヲ臥セテ奇異カリケル者カナ	③	会話、標題
74		17	東人、宿川原院被取妻語	鬼ノ吸殺テケルナメリトゾ	①	本文
75		18	鬼、現板來人家殺人語	此レハ鬼也ケリ	①	会話、標題
76		19	鬼、現油瓶形殺人語	此ル物ノ氣ハ様々ノ物ノ形ト現ジテ有ル也ケリ	⑦(物ノ氣?)	標題
77		22	猟師母、成鬼擬噉子語	此レハ鬼ノ我レヲ噉ハムトテ		会話、標題
				然レバ人ノ祖ノ年痛ウ老タルハ必ズ鬼ニ成テ此ク子ヲモ食ハムト	①	話末評語
78		23	播磨國鬼、來人家被射語	此ノ家ニ鬼來ラムトス		会話、標題

79		28	於京極殿有詠古歌音語	鬼ノ現ハニ此ク人ト現ジテ見ユル事ハ難有ク怖シキ事也カシト	⑤(陰陽道)	話末評語
				此ハ何カニ、鬼神ナドノ云ケル事カ		会話
80		31	三善清行宰相、家渡語	何ナル霊ト云フ事遂ニ不聞エデ止ニケリトナム	⑦(物ノ霊)	話末評語
				實ノ鬼神ト云フ者ハ道理ヲ知テ不曲ネバコソ怖シケレ		会話
				鬼ナレドモ悪事モ否不發ヌ事也ケリ	⑥(鬼)	話末評語
81		34	被呼姓名射顕野猪語	實ノ鬼神ナラバ、己ノ名コソ可呼キニ	⑦(野猪)	心中
82		35	有光來死人傍野猪、被殺語	死人ノ所ニハ必ズ鬼有リト云フニ、	⑨(慣用句)	話末評語
83		36	於幡磨國印南野殺野猪語	葬送ノ所ニハ必ズ鬼有ナリ。其ノ鬼ノ我ヲ噉ハムトテ來ニコソ有ケレ	⑨(慣用句)	心中
84		44	通鈴鹿山三人、入宿不知堂語	「鬼有」トテ、人更ニ不宿ヌ舊堂有ケリ		本文
				其ノ天井ニテ顔差出ケム物ハ狐ノ謀ケルニコソ…實ノ鬼ナラムニハ	⑦(狐)	話末評語
85	28	28	尼共、入山食茸舞語	天狗ニヤ有ラム、亦鬼神ニヤ有ラム	⑧(人)	心中
86		29	中納言紀長谷雄家顕狗語	家ノ内、鬼現ズル事有ラムトス		会話
				然レバ、實ノ鬼ニ非ネドモ、現ニ人ノ目ニ鬼ト見ユレバ、鬼トハ占ヒケル	⑧(人)	話末評語
87		35	右近馬場殿上人種合語	彼レ見ヨ、鬼ノ書中ニ馬ニ乗テ行クヲ	⑧(人)	会話
88		44	近江國篠原入墓穴男語	此レハ鬼ニコソ有ラメ	⑧(人)	心中
89	29	18	羅城門登上奏見死人盗人語	此レハ若シ鬼ニヤ有ラム	⑧(嫗)	心中
90	30	1	平定文假借本院侍従語	極キ鬼ノ心持タル者也トモ	⑨(形容)	心中
91		14	人妻、化成弓後成鳥飛失語	此レハ若シ鬼神ナムドノ変化シタリケルニヤ	⑨(定型)	心中
92	31	12	鎮西人至度羅嶋値虎語	此ル不知ヌ所ニハ鬼モ有ラム	⑨(定型)	心中
93		13	通大峯僧侶行酒泉郷語	鬼ニテモ神ニテモ有	⑨(定型)	心中
94		14	通四國邊地僧、行不知所被打成馬語	鬼ニテモ神ニテモ	⑨(定型)	心中
95		15	北山狗、人為妻語	何ナル物ナラム。鬼ニヤ有ラム	⑨(神?)	心中
96		16	佐渡國人為風被寄不知嶋語	此ハ鬼ニコソ有メレ。我等ノ、鬼ノ住ケル嶋ヲ不知デ來ニケリ		心中
97		21	能登國鬼寝屋嶋語	然レバ鬼ニハ非ザリケリ、神ナドニヤ有ラムトゾ疑ケル	⑧	話末評語
				其ノ光ノ浦ヨリ鬼ノ寝屋ハ一日一夜走テ人行ナル	⑩(地名)	本文、標題
98		27	兄弟二人、殖萱草紫苑語	我レハ汝ガ祖ノ骸ヲ守ル鬼也	⑥(鬼)	会話(自称)
99		33	竹取翁、見付女児養語	鬼カ神カ	⑨(定型)	会話
100		35	元明天皇陵點定恵和尚語	石ノ鬼共ヲ廻□池邊陵ノ墓様ニ立テ、微妙シ。	⑩(石像)	本文